

2006年4月30日 復活節第3主日礼拝

『混沌の中の光』

(創世記1章1～5、使徒言行録19章28～40)

パウロたちを取り巻く様子は、ますます混迷をきわめてきました。「そのころ、この道のこととただならぬ騒動が起こった」(23節)。パウロたちが、「手で造った偶像などは神ではない」。そう言って、エフェソの町の人々を怒らせてしまったのでしょうか。エフェソの町で、パウロはすでに3年も伝道していました。もしパウロたちの伝える道(信仰)が気に入らなければ、もっと早い段階で、このような騒動が起こっていても不思議ではありませんでした。けれども実際には、3年も経ってからこの騒動は起こりました。なぜならエフェソの人々の本音は、先祖伝来の信仰をないがしろにされたことが原因ではなかったからです。そのことは、銀細工師の親方デメトリオが口にした言葉からも明かです。27節「これでは、我々の仕事の評判が悪くなってしまふ・・・」。パウロが反対された理由は、これでした。偉大なアルテミスの神殿がないがしろにされる。この女神のご威光さえも失われ、てしまうと訴えてはいます。けれどもそれは付け足しのようなものでした。彼らの本音は、偶像礼拝を否定されたら、自分たちの仕事や生活は成り立たなくなる。というのでした。

人は、何かするとき、本当の理由を隠したがりません。実にもっともらしい理由を立てて、事に当たろうとします。エフェソの町の場合、アルテミスへの信仰がそれでした。銀細工師たちの本音は、自分たちの腹のことでしかありません。普段から、どれほどこの女神を敬っていたのか。わかりません。いつもならば、この町の信仰がちゃかされても、それほど怒ったりしなかったのかもしれない。ただ、外からパウロたちがやってきて、ものすごい勢いで人々の心をつらえ始めている。目には見えない神様を拝むことで、人間が造った偶像など神ではないと宣べ伝えている。この信仰を皆が信じたら、自分たちの生活は成り立たなくなる。初代教会の力強い伝道活動によって、自分たちが今まで築いてきたものが脅かされようとしている。そうなってはじめて、人々は大きな声を上げ、キリスト反対を叫びだした。それが真相のようです。

これ以上キリストの道が広まらないように、何としても自分たちの生活を守ろうと、反対者たちは一つの賭けにでます。市民集会を開いて、パウロたちを断罪しようというのです。具体的には、パウロの仲間を捕まえて、野外劇場へとなだれ込みました。当時、ローマやギリシアでは、一つの都市がそれぞれ自治権を認められていました。とくにエフェソは、ローマ有数の経済都市でしたから、市民による自治が行なわれていました。もちろん、ローマ帝国から遣わされた総督がおり、町を監督して、裁判や警察などを掌握していました。しかしそれ以外の日常生活では、市民による自主的な運営がなされていました。何かあれば、市民が劇場に集まって集会を開き、問題の解決に当たっていました。今でいうところの民主主義、その原形が、この時代のローマ諸都市にみられたのです。2千年前当時、きわめて先進的、あるいは革新的なことでした。

それほど斬新な都エフェソでしたが、しかし、この騒ぎは一体どうしたことでしょう？パウロたちを陥れようと、実際に行なわれたのは、市民による民主的な集会とは、全く様子の違うものでした。パウロの仲間たちを、暴力に訴えるようにして、無理矢理連れて来ています。冷静な話し合いなど、みられません。ただ人々が、めいめい好き勝手なことを口走り、混乱するばかりです。この時の様子を、聖書はこう記しています。32節：「さて群衆はあれやこれやとわめき立てた。集会は混乱するだけで、大多数の者は何のために集まったのかさえ分らなかった。こんなお粗末な状態でした。これが、世に名高いローマの民主主義とは、まったく思われませんでした。

事態はますます混乱していきます。混沌の極みへ向かっておりました。ところがここに一人だけ、冷静にことを成り行きを見つめている人がいました。エフェソの町の書記官です。この人がこの集会に姿を現わし、混乱する集会の中で、こう述べました。35節：「エフェソの諸君、エフェソの町が、偉大なアルテミスの神殿と天から降って来た御神体との守り役であることを、知らない者はないのだ。どうやら人々が崇めているアルテミスの御神体というのは、空から降ってきた隕石か何かだったようです。町の書記は、この町が宗教的に特別な意味をもっていることを認めて、このように語りかけました。「この町が偉大な女神の守り役として、歴史を積み重ねてきたことは、わたしもよく知っている。そのことは決して誰も否定することなどできないのだから、もっと冷静に、静かにしなさい。決して無謀なことをしてはならない」。そう言って、人々の怒りを静め、事の本質に目を向けさせようとします。「諸君がここに連れてきた者たち（パウロとその仲間）は、神殿を荒らしたのでも、我々の女神を冒瀆したのでもない。もしデメトリオと仲間の職人たちが誰かを訴えたいのなら、決められた日の裁判に訴え出なさい。・・・それ以外に要求があるなら、正式な会議で解決してもらうべきである。」 というのも「本日のこの事態に関して、（このまま続けるなら）暴動の罪にわれわれ自身が問われるおそれがある。この無秩序な集会のことでは、何一つ弁解する余地がないからだ」（36～40節）。ここまで言うと書記官は、この無秩序な集会を解散させました。こうしてパウロと仲間達は無罪放免となりました。とても逃れられそうになかった窮地を脱して、キリストを宣べ伝える自由を再び与えられたのでした。

神様は、混沌の中に光を与えてくださいました。あの町の書記官はクリスチャンではありませんでした。キリストを信じていたから、パウロたちをかばった訳ではないのです。良識ある役人として、この騒動の成り行きを見つめ、これをやめさせました。それほど、銀細工人たちの起した騒動は、ゆゆしきものだったのです。世俗の役人が公平な目で見て、事の真偽を正し、適切に裁いてくれました。このことの中に、天の配剤を見る思いがします。同じ信仰に生きる人びとだけが味方とは限らないのです。誰一人味方などいない。そう思わざるを得ない状況で、神様は、思わぬところに助けを与えてくださるのです。

さらにもう一つ、今日の聖書で見逃すことのできないテーマがあります。それは「教会」です。一見すると、今日の物語には、「教会」という言葉は一切見当たりません。ところが

ギリシア語でここを読みますと、エクレシア = 教会という言葉が何度も出てきます。ここでは「集会」と訳されています。「エクレシア」は、もともと、「呼び集められた者」、あるいは「招集された者たちの集い」という意味です。初めは一般社会で集会とか自治会、議会のことをいう言葉でしたが、やがて「キリストの教会」、「神の民」をあらわす言葉として用いられるようになりました。

使徒 19 章では明らかに「市民集会」という意味で、この「エクレシア」が使われています。しかしこれは、理想的な集会（エクレシア）とは、ほど遠い有り様でした。混乱と破壊、暴力と混沌だけが支配する修羅場でした。一步間違えれば、町の人々の方が暴動と反乱の罪に問われかねない、偽りの「集会」でしかありませんでした。

この「偽りの集会」のもとで、パウロとその仲間たちは、風前の灯火でした。人間の偽りや暴力（言葉の暴力も含んで）に翻弄されて、逃れる道すら見いだせないほどでした。そこに、神は御手を伸ばされます。キリストの信仰とは全く関係のない一人の人を通して、神様は、愛する者たちを滅びから、危険から救い出されたのです。そればかりか、神様が証ししてくださいました。パウロたちは、決してこの世の破壊者でも略奪者でもないことを。救いと平和をもたらす神の使者であることを、神自ら証言してくださいました。こうして神様は、偽りと混沌しか生み出さない、偽りの「集会」を、解散させられました。あとに残ったのは本当の集会でした。神がキリストの名において呼び集められた教会が、教会だけがあとに残りました。この教会、キリストの名によって呼び集められた教会こそ、真実な集会です。この世の光であり、わたしたちの命を照らす灯火です。

この世では、いまなお、偽りと混沌だけが支配しているように見受けられます。何が良くて何がいけないのか、それすらも、わからなくなっている。混沌と闇がこの世を支配しています。けれども神は、この混沌に光を与えられました。光を与えることのできる御方です。イエス・キリストの父なる神にとって、どれほど深い闇も、闇ではありません。イエス・キリストこそ、わたしたちの光です。この光が世を照らし、この世の終りに向かって、全世界を、そしてわたしたちを支配しておられます。神による光の支配は、キリストにおいて、すでに始まっているのです。わたしたちのただ中で、すでに！ この光に導かれて、わたしたち教会が地の塩、世の光となっていけますように。混沌に満ちたこの世を照らす、世の光となることができますように、祈りましょう。偽りと古きをかなぐり捨てて、主の光のもと、真の教会 = 新しいイスラエルへと脱皮できますように、主の助けと導きを祈りましょう。 [説教者：堀地正弘]